慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ナチズムにおける〈民族同胞〉と〈共同体異分子〉：<br>デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツ：<br>ある近代の社会史』木村靖二・山本秀行訳(三元社, 1991年)によせて |
| Sub Title | 《Volksgenossen》 und 《Gemeinschaftsfremde》 unterm Nationalsozialismus |
| Author | 矢野, 久 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1992 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.85, No.1 (1992. 4) ,p.102- 110 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19920401-0102 |
| Abstract | |
| Notes | 書評論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920401-0102 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」85巻1号（1992年4月）

書評論文

# ナチズムにおける＜民族同胞＞と＜共同体異分子＞

## ——デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツ—ある近代の社会史—』木村靖二・山本秀行訳（三元社，1991年）によせて——

矢野　久

## I

私が本書の著者ポイカート（私の感覚ではポイケルトに近いので，以下ポイケルトと表現する）と議論してから早10年の歳月が過ぎ去ろうとしている。当時若手の歴史家として注目されはじめていた彼は，ナチス時代の抵抗と日常をめぐって議論が白熱したエッセンのジナゴテークの討論会で，ナチス時代に関する歴史教育の必要性を強調した。参加者の多くが10代の若者であったことは今なお強く印象に残っているが，討論会の後，数人の仲間と居酒屋でビールを飲みながらナチス研究について議論した。その時，詳細な実証的歴史研究こそ必要だと主張した私に対し，ポイケルトは実証性よりはむしろ問題提起や啓蒙性を強調していた。その時の私の主張は，従来のナチス研究をさらに進展させるためには，労働者が働く「場」に注目し，このミクロの世界の社会史を推し進めることが重要であるというものであった。一方，ポイケルトは，企業文書館の閉鎖性がなくならないかぎり，労働過程の社会史的分析は不可能であり，ミクロの社会史を積み重ねることよりはむしろ，ナチス・ドイツをいかに捉えるかということの方が重要であると声高に主張してやまなかった。私はその後，企業文書館の資料をもとに「職場」に焦点をあてた実証的研究[1]を公にすることとなったが，ポイケルトはすでにその時，ナチス・ドイツに関する啓蒙的書物を書き進めていたのである。それは，1982年，Volksgenossen und Gemeinschaftsfremde（『民族同胞と共同体異分子』）というタイトルで出版された。

それからおよそ10年の年月が経過し，1991年，『ナチス・ドイツ—ある近代の社会史—』というタイトルでこの書物は日本語に翻訳される運びとなったが，公刊される前に，ポイケルトは惜しまれながら40歳の若さで逝去していた。

本書評論文の課題は，まず第一にポイケルトの主張を明確にすることにある。それによって，すでにわが国で紹介されているポイケルトのナチス像[2]はそれ自体としては誤っているものではないが，ポイケルトが全体として言いたかったこととは必ずしも整合的であるわけではないということが明らかとなるであろう。さらに，1980年代のはじめに，旧西ドイツの若手歴史家がいかなるメッセージを読者に投げかけようとしたのかを呈示することができると考えるのである。イギリスのドイツ史家メイスンが，本書と同時期にナチス研究の方向転換をおこなった

注（1） Hisashi Yano: *Hüttenarbeiter im Dritten Reich*, Stuttgart 1986.

（2） 村瀬興雄『ナチズムと大衆社会』（有斐閣，1987年），宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』（岩波書店，1991年）。

が，そのメイスンと比較しながらポイケルトのメッセージを特徴づけることにする。

第二の課題は，ポイケルトの論旨に沿ってその問題点を指摘し，ポイケルトの主張を私なりに批判すると同時に，ポイケルトの業績を批判的に評価することにある。そうすることによって，今は亡きポイケルトに哀悼の意を表したい。

この10年間のドイツ（旧西ドイツ）の歴史学界の動向については，訳者の一人である山本秀行氏が解説している。しかしナチス研究プロパーについては原書刊行時までの論争が紹介され，1980年代については，この10年間のナチス研究の成果ではなく，この間になされてきた歴史学界の論争，とりわけ「ドイツの特有の道」論争と「歴史家論争」が紹介されるにとどまっている。最近の10年間のナチス研究の成果と現状をふまえると本書はどこに位置するのか，という疑問には残念ながら訳者解説は答えてくれない。評者はすでに本書を含めて，1980年代のナチス研究の成果の位置づけをおこなっているので，[3] 参照されたい。

## II

本書のねらいは，10年前の時点で，その当時までのナチス研究の成果を整理し，さらにその当時の青少年たちに自分たちの国の過去を考えるための素材とこれまでのナチス研究とは異なる歴史をみる視角を問題提起的に呈示しようとするところにある。つまり，立場は異なるとはいえ，1960年代の終わりに刊行されたシェーンボウムの『ヒットラーの社会革命』[4] と同様に，ポイケルトは，シェーンボウムのナチス・ドイツの位置づけから15年の年月が経過した時点で，この15年間のナチス研究を整理し，別の視角からナチス・ドイツを位置づけ直そうとしたのである。

ところで，ポイケルトが当時までのナチス研究という時に念頭におき，かつ批判の対象にしようとしたのは，大きく分ければ「ドイツの特有の道」論と近代化論である。

まず，「ドイツの特有の道」論であるが，この論は，従来の歴史主義的な伝統的歴史学に対する，1960年代末以降の西ドイツの歴史学界内部での批判的潮流と関連している。1970年代に，「社会構造史」派として西ドイツ歴史学界で定着した「歴史的社会科学」としての歴史学は，イギリスなどのような「近代」化の過程を歩まなかったドイツ特有の歴史的帰結としてナチス・ドイツを把握しようとするものであった。「社会構造史」は，ドイツにはいわゆる「近代」というものがなかった点にナチズムの歴史的・社会的起源を見いだし，したがって「近代」こそがナチズムに対抗する軸であるとして，「近代」を肯定的に評価していたのである。ポイケルトは，こうした「上からの社会史」=「社会構造史」学派の一人，ハンス・モムゼンの下で学位論文を作成し，西ドイツ歴史学界に登場した。しかし，ポイケルトは「社会構造史」に対して批判的であり，それゆえ，ナチズムを「ドイツ特有の道」の帰結と捉えることにも批判的なのである。

次に，近代化論であるが，ダーレンドルフ[5]やシェーンボウムの近代化論的ナチズム理解によれば，意図しなかったとはいえナチスでも「近代化」は進行していたのであり，それは「社会革命」と呼びうるくらいの変革であったというものである。その意味で，近代化論は，近代が

注（3） 訳者解説では言及されていないが，井上茂子・木畑和子・芝健介・永岑三千輝・矢野久『1939—ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』（同文舘，1989年）の序章「ドイツ<第三帝国史>研究の現在」，また矢野久「大戦期ナチス・ドイツにおける『近代化』と『統合』問題—労働と社会に関する最近の研究史を中心に—」（『三田学会雑誌』第82巻第1号<1989年4月号>）。

（4） David Schoenbaum: *Hitler's Social Revolution. Class and Status in Nazi Germany 1933-1939*, New York 1966.『ヒットラーの社会革命』大島通義・大島かおり訳（而立書房，1978年）。

（5） Ralf Dahrendorf: *Gesellschaft und Demokratie in Deutschland*, München 1971 (1965).

欠落していると捉える「社会構造史」とは異なり，ナチスにおいても近代化が進行したとみなすのである。

このように，「近代」の把握の仕方は，「社会構造史」と「近代化論」では異なる。しかし，「近代」を肯定的に捉えているという点，また，「近代」化の歴史過程を社会構造の客観的歴史過程の問題として把握している点では両者は共通しているといえる。

ナチス・ドイツの位置づけにおいてきわめて大きな影響を与えていたこの二つの考え方に対して，ポイケルトは，まず，「近代」を肯定的に捉えるのではなく，逆に「近代の病理」としてナチズムを理解しようとする。その意味で，ポイケルトは「近代」そのものを批判的に捉えようとしているのである。第二に，彼は，社会構造の客観的歴史過程だけからではなく，むしろ重点を「ふつうの人々」の「日常」におき，「下からの社会史」=「日常史」の視点からナチス・ドイツを分析しようとする。

それでは，この「近代の病理」としてのナチズムとはいったいどういうものなのであろうか。ポイケルトは，「近代の病理」そのものの構造を積極的に展開するのではなく，むしろ，その当時までのナチス研究の成果をまとめ，それらを「近代の病理」の歴史として読み替えている。その際ポイケルトは，そもそも原書のタイトルである「民族同胞と共同体異分子」という二つの軸をもとに，「近代の病理」を描こうとしているのである。翻訳書のサブ・サブタイトルには「ナチ支配下の『ふつうの人びと』の日常」とあるが，この「ふつうの人びと」が，<民族同胞>と<共同体異分子>とのあいだで揺れ動く構造こそが，ポイケルトの主張したかった点なのである。

## III

本書が出版された同じ1982年，イギリスのドイツ史家メイスンは，論文集の比較的長文の序論の中で，それまでのナチス研究を批判的に考察し，これまでとは異なる視角からのナチス研究の必要性を強調した。(6) メイスンは，1960年代，ナチス・ドイツにおける「政治の優位」か「経済の優位」かという論争で，東独の「経済の優位」論に対し「政治の優位」の論陣を張り，(7) 続く1970年代には，ナチス労働社会政策の歴史的展開を明らかにすることによって，ナチス体制と労働者階級との関係を実証的に示した。(8) それに対し，1982年の論文では，メイスンは自己の研究成果をも含めたそれまでのナチス研究を批判的考察の対象とするに至った。

1970年代後半にメイスンが主張した論点は，第二次世界大戦前夜にはドイツ労働者階級はナチス体制に対し「拒否的態度」をとるようになっていたこと，そうした態度は労働力不足状況という社会的・経済的な原因によるものであること，こうした「拒否的態度」によってナチス体制は「内政的危機」に陥り，それこそがナチス・ドイツが戦争に突入した究極的原因であるということであった。その意味で，メイスンの主張は，一枚岩的ナチス像，政治史・外交史中心の歴史観を実証的に論破するものであり，歴史の社会構造史的把握に近かったが，歴史のなかでの労働者階級の主体性を重視している点に注目すると，「社会構造史」ではなく，「下からの社会史」に属するものである。

それに対し，1982年時点のメイスンの主張は

注（6） Timothy W. Mason: "Die Bändigung der Arbeiterklasse im nationalsozialistischen Deutschland. Eine Einleitung", in: Carola Sachse u. a.: *Angst, Belohnung, Zucht und Ordnung. Herrschaftsmechanismen im Nationalsozialismus,* Opladen 1982.

（7） 山口　定『現代ファシズム論の諸潮流』（有斐閣，1976年）。

（8） Mason: *Arbeiterklasse und Volksgemeinschaft. Dokumente und Materialien zur deutschen Arbeiterpolitik 1936 bis 1939,* Opladen 1975; ders.: *Sozialpolitik im Dritten Reich,* Opladen 1977.

かなり変化している。労働者の拒否的態度がナチス体制の内政的危機をもたらしたという1970年代のメイスンの主張に対し，ここではメイスンは，ナチス体制下の日常的現実に対して労働者階級が不平不満をもっていたにもかかわらず，なぜナチス体制に「抵抗」するまでにはいたらなかったのか，という問題を提起している。メイスンは，テロル，労働者階級の内部分裂による無力化，物的譲歩，ナチス体制への「統合」が，労働者階級がナチス体制に対して大衆的抵抗をなしえなかった諸要因であった，と主張する。(9)

労働者階級のナチス体制への「統合」の前提として，メイスンは「分裂のメカニズム」を構想している。この「分裂のメカニズム」とは，政治的に与えられているものを享受するが，それらの間の関連については考えないという「政治的統合」である。(10)

このように，メイスンは1982年には，労働者階級が日常的現実の中で不平不満を感じていたにもかかわらず，なぜナチス体制への抵抗にまではいたらなかったのかという問題提起に視点を移し，さらに，その諸要因が相互にどのように関係していたのかを明らかにすることこそ，今後のナチス研究がとり組まなければならない課題とみなしたのである。換言すれば，メイスンは，ナチス体制の日常的現実の二つの側面，つまり，テロルを核にした抑圧による労働者階級の「規律化」と合意形成による「統合」の相互関係の考察に，今後の研究の方向性を求めるのである。

## IV

メイスンの1982年の主張が以上のように整理されるとすれば，ポイケルトの本書での主張は，メイスンと比較してどのような特徴があるといえるのだろうか。まず，ポイケルトの主張を概観することにしよう。

本書は，第1部「例外状態下の『日常』」，第2部「『民族共同体』と『民族反対派』のはざまで」，第3部「『民族同胞』と『共同体の異分子』」の3部から構成されている。

ポイケルトは，第1部で，ナチズムの台頭を両大戦間期のドイツ産業階級社会の危機の帰結としてとらえているが，本書の中心は第2部以降にある。彼によれば，「ふつうの人びと」はナチス・ドイツの現実がプロパガンダとは異なるものであることを認識したため批判と不平不満を表明するにいたったが，テロル，戦争，社会関係のアトム化により，ナチス支配を消極的に拒否し，その結果，消極的に同意するにいたり，抵抗にはいたらなかったことになる。ポイケルトは，この批判ないし不平不満と同意という相矛盾する二つの側面を「ふつうの人びと」の日常から掘りおこそうとするのである。(第3章)

ヒトラーの「総統神話」の体制統合力を評価しつつも，ポイケルトはそれだけでは国民をナチス支配に積極的に合意させることができないとみなす。対立的な日常的現実に対する非日常的な「ヒトラー神話」の「統合」力を主張したカーショウと異なり，(11) ポイケルトは，「民族共同体異分子」を常に作り出し，テロルの対象にすることによって，日常における批判的要素を抑えこみ，そうすることで国民をナチス支配に合意させるシステムがナチス支配にあったというのである。さらに，彼は，ナチス支配に対する抵抗の可能性が奪われたのは，1920年代に始

注 (9) Mason: "Bändigung", S. 14ff., 36 ff., 39 ff., 42 ff., 46 f.

(10) Mason: "Bändigung", S. 46.

(11) Ian Kershaw: *Der Hitler-Mythos. Volksmeinung und Propaganda im Dritten Reich,* Stuttgart 1980; ders.: "Alltägliches und Außeralltägliches: ihre Bedeutung für die Volksmeinung 1933-1939", in: *Die Reihen fast geschlossen. Beiträge zur Geschichte des Alltags unterm Nationalsozialismus,* hrsg. v. Detlev Peukert und Jürgen Reulecke, Wuppertal 1981.

まる現代的な「大衆消費社会」への移行によって，人びとが「私的な場に退却」したからであると続ける。(第4章)

このように，ポイケルトの主張は，それ自体としては非常に興味深いものである。しかし彼の主張は，必ずしも整合的に構築されているわけではない。総統神話力が欠落した状況のなかで，国民をナチス支配に積極的ならびに消極的に合意させる上記の二つの要素，つまり「共同体異分子」の創出によるテロル化，「私的な場への退却」がどのように絡み合っていたのかについては，彼は明らかにしてはいないのである。

メイスンの研究対象は「労働者階級」であったが，ポイケルトのいう「ふつうの人々」あるいは「国民」が実際には何を意味するのか，かならずしも明確ではない。第5章以下でポイケルトは人びとの日常の様々な領域を明らかにするが，そこでは社会集団別の社会的ミリューを対象とする。具体的には，中間層，労働者，青少年である。

労働者の日常生活と抵抗を対象とする第7章では，とりわけ1970年代のメイスンなどの研究に依拠している。社会集団のなかでもっとも伝統的な社会的ミリューをもっていた労働者の領域にも，ナチスはテロルを駆使して入り込み，労働者の日常的文化の政治的側面を破壊することに成功した。しかし一方，ナチスは日常的なインフォーマルな領域を破壊することはできず，この面では労働者の批判的な拒否的な態度は健在であったというのである。1970年代のメイスンが，こうした労働者の日常的領域での拒否的態度をナチス・ドイツの「内政的危機」の兆候として重視したのに対し，ポイケルトは，労働者の拒否的態度があくまで個人主義的なものであり，また，総統神話の社会的統合力が機能したことを理由に(この点は先の主張と矛盾しているが)，労働者の連帯的な行動の基盤が狭くなったと捉えている。ポイケルトは，ナチスが労働者の政治的連帯構造を破壊することによって，長期的には個人主義的で業績志向型の労働者の登場に道を開いたと主張するのである。

しかし一方，労働者の組織的抵抗は確かにおこなわれており，また，反抗的，拒否的な態度も現実にみられた。組織的抵抗と非同調的な日常行動とは，ナチス支配の下では区別されなくなり，両者のあいだは流動的となる。ポイケルトはそこから労働者の抵抗の多様性を導き出すが，先の新しいタイプの労働者の出現との関係は不明のままである。

本書のテーマに関係するポイケルト自身の実証的研究としては，ライン・ルール地方のドイツ共産党の抵抗運動以外にエーデルワイス海賊団がある。(12) 第八章「青少年の動員と不服従」で，再度このエーデルワイス海賊団とならんで，モイテン，スウィング青年の三つの青少年グループを扱っている。モイテンがライプツィヒの労働者街の「共産主義的」要素をもつ青少年グループであり，スウィング運動が大都市の中間層の青少年グループの運動であったのに対し，エーデルワイス海賊団はラインとルール地方の労働者階級出身の青少年の自然発生的なグループである。ポイケルトは，ナチスが抑圧を強めれば強めるほど，政治的ではなかった海賊団がますます自分たちの自律的空間を強化し，一種のサブカルチャーを形成していった過程とメカニズムを描いている。この章でポイケルトが主張したかったのは，労働者，ここでは青少年たちのおかれた社会経済体制と支配的ヘゲモニーのなかで，抑圧され，狭められはしたものの，労働者の日常文化はサブカルチャーとして生き続け，エーデルワイス海賊団もそうしたサブカルチャーのなかで生きることができたということ，

注 (12) *Ruhrarbeiter gegen den Faschismus. Dokumentation über den Widerstand im Ruhrgebiet 1933–1945,* Frankfurt a. M. 1976; *Die KPD im Widerstand. Verfolgung und Untergrundarbeit an Rhein und Ruhr 1933–1945,* Wuppertal 1980; *Die Edelweißpiraten. Protestbewegungen jugendlicher Arbeiter im Dritten Reich. Eine Dokumentation,* Köln 1980.

さらに海賊団はこうした労働者の日常文化に新しいスタイルと要素をもちこんだということである。そしてポイケルトは，ナチスが自己の組織と抑圧機構を完成しようとすればするほど，そこから逸脱するこうした青少年グループのサブカルチャーが形成され，結局ナチスは社会を完全には掌握することができなかったと主張するのである。

このように，ポイケルトは，第2部では社会集団に焦点をあて，ナチスの政治によって社会集団がどの程度影響されたのか，また，それに対し同調・抵抗したのかを明らかにすると同時に，社会経済上の長期的な変化を問題にする。すでに1960年代にシェーンボウムは，ナチス・ドイツが結局のところドイツ社会の「近代」化を推し進め，「革命」と呼びうる長期的変化をもたらしたとして，「褐色の革命」テーゼを主張していたが，そのシェーンボウムに対し，ポイケルトは，ナチズムが伝統的なミリューを破壊し，それゆえ「近代化」を推進したが，その「近代化」によって逆に，ナチスが強要するものを拒否する潮流が私生活への逃避と退却によって生まれ，こうした潮流のなかから価値観の変化が生じたのであって，けっして「革命的」とはいえないと主張する。(第9章)

社会集団のミリューを論ずる箇所では，ポイケルトは，ナチスによって社会集団の伝統的ミリューが破壊されつつも，社会集団は，かろうじてその自律的空間を維持し続け，そうした空間は「私生活への退却」によって持ちこたえられたとみなしていた。ナチスの抑圧に対抗する最後のとりでが社会集団の私生活への退却によって生まれたとみる点では，ポイケルトは社会集団の私生活への退却を評価しているようである。1970年代のメイスンは，明らかに労働者階級のミリューの存在こそがナチスに対抗する消極的抵抗の基礎をなしていたと考えていたと思われるが，1982年論文ではメイスンは，労働者階級の「分裂」状態がナチスへの対抗を弱体化させたとみなした。ポイケルトは1970年代のメイスンに依拠しながら，私生活への退却の積極的側面を主張している。ポイケルトが，社会集団のミリューを基礎とする私生活への退却を想定しているのか，はたまたミリューの解体の上に生ずる私生活への退却を想定しているのか，明らかではない。換言すれば，社会集団の「社会的集団性」を基礎にした私生活への退却なのか，それとも社会集団の「社会的集団性」の解体の延長線上に私生活への退却を考えているのかが明らかではないのである。ポイケルトはこの第2部では，おそらく，社会集団の「社会的集団性」を基礎にした私生活への退却を想定しているように思われる。(13)

## V

社会集団を前提に議論していたのが第2部とすれば，第3部の「『民族同胞』と『共同体の異分子』」では，ポイケルトは，ナチスの社会的統合政策の核である「民族共同体」の宣伝・演出とそれに対する国民の日常的な態度・行動とがどのような関係にあったのかを明らかにしようとする。

ポイケルトは，第10章で，建築や芸術から，ラジオ，映画，大衆雑誌，旅行，おもちゃなど娯楽や気晴らしを提供するものまでの広い範囲にわたる文化を扱い，国民を消極的にナチス支配に合意させる文化の役割を問題とする。民族共同体が社会的に演出・宣伝される反面，国民は政治とはかかわらない私的領域や利己的な消費に逃避するというアンビヴァレントな関係が生みだされた。ポイケルトは次のように結論づける。「国家が公共性を演出した結果は，公共生活の空洞化と，非政治的なものと私的なもの

注 (13) 訳語についてであるが，Volksopposition は「民族反対派」と翻訳されているが，この Volk はこの場合 Volksgemeinschaft「民族共同体」の Volk「民族」ではなく，以上に挙げた社会集団と関連した民衆あるいは国民に近い概念として使われているのではないであろうか。

への逃避をもたらしただけであった。とはいえ，このような逃避によって，消極的な合意が，つまり実現された『正常な状態』への合意が，充分に達成されたのである。」(310頁。)

しかし，こうした消極的合意にはもう一つの側面があった。抑圧機構は強化され，ナチス的秩序を強制するテロル機構の範囲は拡大していったが，それは秩序を攪乱するものに向けられていった。ポイケルトによれば，国民の多くは，テロルが「反社会的分子」，ここでの表現によれば「共同体異分子」に向けられているかぎりではそれに同意していったのである。ナチスは，「共同体異分子」をつくりあげ，「民族共同体」から排除し，人種的に純潔な民族共同体のなかに，産業社会の混乱した多様性をテロルを用いて組み入れようとしたというのである。(第11章)

「共同体異分子」をつくりあげ，テロルの対象とすることによって国民を民族共同体に合意させるという社会的統合政策に「正当性」を与えたのは，ナチスの「人種理論」である。第12章の課題はそうした社会的統合政策としての人種主義を明らかにすることにある。ポイケルトによれば，ナチスは，「異民族」や政治的敵対者，「反社会的分子」，ユダヤ人を「共同体異分子」として排除し，テロルの対象とする一方，ナチスの社会規範や労働規律に順応しえない者は，同国民といえども「共同体異分子」として排斥の対象にすることによって，「民族同胞」を規律化しようとした。ナチスの人種主義の特殊性は，この「選別」を人種生物学的に正当化したところにあった。「共同体異分子」と「民族同胞」との区別は，民族共同体とその外部との区別にとどまらず，民族共同体内部にも向けられており，ナチスの人種主義は，体制に順応的な社会行動をテロルで強制し，規範化する手段となったのである。しかし，ポイケルトは，この点をけっしてナチスの特殊性にのみ求めたわけではない。むしろポイケルトは，社会的に順応しない行動に対する差別と人種主義的な差別化との結合が，世紀転換期以降の「優生学」の延長線上にあるものとみなし，ソフトな人種主義とナチス人種主義とのあいだに根本的な区別があると考えることには反対するのである。

そして最後に，第13章でポイケルトは，ナチス・ドイツがテロルを伴う監視・抑圧機構を強化・拡大することによって日常生活がどのように変化したのか，日常生活の変化は長期の時間の流れの中でいかなる意味をもったのかを明らかにする。ナチスのテロル機構は「社会」をばらばらに解体し，「廃墟と化した社会」をもたらしたのである。ナチスに同調するか，反対・抵抗するかを問わず，すべての人びとは「日常生活のアトム化」にさらされた。「私的な行動領域は，せばめられ，孤立化させられて，体制にとって危険となりうる一切の社会的結びつきと意味とを欠く，自己完結的な個人主義へと押しもどされた。『民族共同体』は，声高に賛美され，抑圧手段をもって擁護されたが，けっきょくのところ社会のアトム化に帰着したのである。」(395～6頁。)

両大戦間期の危機との関連においてナチス・ドイツを考察していた前半部分とは異なり，ポイケルトはここでは，戦後社会との関連において捉えている。1950年代に産業社会がドイツで確立したのは，とりわけナチス・ドイツにおける，業績志向をもつ，個人主義的な新しいタイプの労働者，孤立した私生活を営む近代家族の出現，大衆消費，余暇，マス・メディアの成長に負うところが大きいと彼は主張する。このようにポイケルトは，私的な場への退却がナチス支配のもとで促進されたが，この私的な場から，50年代の「経済の奇跡」にみられる，消費・業績志向のダイナミズムが形成されたと主張するが，その主張の根拠は示されていない。

それはともかく，第2部では社会集団が前提とされていたとすれば，第3部ではふつうの人々の「社会集団性」の規定性はなくなっている。ここでは「国民」が問題とされるのである。また，第2部では，社会的ミリューとその変化という形で社会集団の主体的側面が明らかにされ

ているのに対し，第3部では，考察の中心はナチスの社会的統合政策におかれている。国民が，政策対象として，「民族同胞」と「共同体異分子」のはざまの存在として設定されているのである。

しかし問題は，社会集団の「社会的集団性」が社会的統合政策の対象となるなかで，どのように変化していったのかということである。社会集団が「私生活への退却」によって逆にナチスに対抗する最後のとりでをかろうじて保持しえたという第2部の論旨は，第3部では雲散霧消してしまった。ナチスのテロルのもと，国民は「日常生活のアトム化」にさらされ，社会は「廃墟と化した社会」に転化してしまったとすれば，社会集団の「私生活への退却」の積極的意味は消失してしまうことになる。

私はここであえて翻訳にしたがって「国民」という言葉を使った。しかし，ポイケルトが使用した Bevölkerung という用語は，ドイツ国民のみならずドイツに居住する住民全体を示す言葉といえる。ポイケルトは，ユダヤ人，ジプシー，外国人労働者をも射程範囲に入れて，社会的統合政策の展開のなかで，主としてドイツ人が，「民族同胞」と「共同体異分子」のはざまで揺れ動く様相を明らかにしようとしたのである。したがって，「国民」ではなく，むしろ「住民」の方がポイケルトの真意により近いと思われる。

また，私は「社会的統合政策」という言葉を使ったが，これはポイケルトの原語では Gesellschaftspolitik に対応するものである。ポイケルトはこの Gesellschaftspolitik 概念を使用することによって，通常使われている Sozialpolitik とは異なるものを意図的に表現しようとした。Sozialpolitik は日本語では「社会政策」であり，本書でポイケルトは「社会政策」をナチスの対住民政策として特徴づけたのではない。翻訳では Gesellschaftspolitik は「社会政策」と訳されているが，社会的統合政策ないし社会的順応化政策というような意味である。

## VI

以上，ポイケルトの論点とその問題点を述べてきたが，最後に，ポイケルトの問題提起を位置づけてみよう。

ポイケルトは，「非同調」から拒否，抗議や抵抗にいたるまでの多様な形態の不平不満が体制への合意と矛盾するものではなかったと主張する。不平不満の諸形態と合意が矛盾しなかった原因についてポイケルトは，(1)テロルによる抵抗運動の無力化，(2)「総統神話」の社会的統合力，(3)人々が「正常化」と繁栄の傾向を非政治的なものと考え，個人主義的にそれにしがみついたことなどを挙げている。しかしこれらの諸要因はいったいいかなる関係にあったのであろうか。どのように相互に関連づけられることによって消極的・積極的合意のシステムができあがったのであろうか。ポイケルトはこうした問題への手掛かりを与えてはいるが，肝心の答えは出していない。しかし問題は，ポイケルトがこうした問題設定に答えていないということろにあるのではない。メイスンが1982年に提唱したことは，要約すれば，テロルによる社会的規律化と社会的統合とがどのような関係にあったのかという問題を提起し，それを歴史研究の対象にすべきだということである。それゆえ，1980年代初頭に，ポイケルトが彼なりにこうした問題への手掛かりを与えたということは評価すべきことなのである。問題はむしろ，その後の歴史研究がはたしてこうした問題に答えようとしたのかという点である。残念ながら，ポイケルトやメイスンの問題提起は，その後の歴史研究ではそれほど真正面からは取り組まれていないのである。

ポイケルトは，ナチズムとその犯罪の「特異性」を近代ドイツ社会の発展の構造的な欠陥から説明する，1960年代，70年代の社会構造史的立場からのナチズム理解には批判的である。一方，彼は，近代化論にみられる近代イコール進

歩という図式に対しても批判的である。ポイケルトは，日常の視点に立脚することによって，近代性のもつ矛盾に注目し，「近代の病理」としてナチズムを理解しようとしたのである。

メイスンがナチズムの問題をナチス体制と労働者階級との支配・被支配の垂直的な構造的関係において捉えようとしていたとすれば，ポイケルトはナチズム問題を長期の時間の流れのなかでも捉えようとしていたのである。メイスンとポイケルトの基本的相違点はまさにここにあるといえよう。ポイケルトは，ナチスが，「民族共同体」イデオロギーによって，ナチ人種主義と結合しながら，「共同体異分子」を常に作り出し，「民族同胞」と差別することによって社会的規律化をはかっていったと主張する一方，近代産業社会の長期の発展傾向の進展，また個人主義的な消費，業績志向の新しいタイプの労働者の出現を結論づけている。なるほど，ポイケルトの論理展開は，これらの傾向を積極的に関連づけてその構造を明らかにするというものではない。社会的規律化が「私的な場への退却」を促進したと考え，そしてその私的な場を長期の近代産業社会の発展の一部と捉え，1950年代に達成された大衆消費社会こそこの私的な場から形成されたが，その開始期はまさにナチス時代であったと考えるのである。そこには証拠は示されてはいない。その意味では，本書は歴史研究の書であるとはいえないが，ポイケルトの社会観を如実に表現したものであることはまちがいない。

ポイケルトやメイスンの問題提起から10年経ち，ナチス研究もその間に急速な発展を遂げたが，ともするとこうした問題提起を無視した実証的研究に埋没してしまった感すらある。ナチス研究もまた，ポイケルトやメイスンの問題提起と新たに取り組む必要があるのではなかろうか。

（経済学部助教授）